

平成27年度授業づくり拠点校（中学校国語）

柳井西中学校 研修主題

心の教育を軸にした学力向上へのアプローチ

～「言語活動の充実」をとおして～

国語科研究主題

「学校生活を豊かにするために、話し合いの場を大切にし、互いの【まだ言葉になっていない言葉】を引き出す言葉の力を育成し、磨き高める指導の工夫」

1 研究にあたって

「身に付けさせたい力（活用力）」の分析と授業の構想

○ 全国学力・学習状況調査に見られる課題

【国語A】問題の正答率は、73.3%で、全国より2.5ポイント、山口県より3.3ポイント下回った。また、【国語B】問題は、65.2%で、全国平均・県平均とほぼ同水準であった。正答数分布グラフを分析すると【国語A】問題では、33問中30問以上の正答数の生徒が、25.9%おり、20問以下の正答数の生徒が22.6%いる。これらの結果から、活用する力は全国・県の平均並みであるが、基礎・基本の定着には課題が見られ、学力の二極化が顕著であるということがいえる。【生徒質問紙】では、「今回の国語の問題について解答を文章で書く問題がありましたが、最後まで解答を書こうと努力しましたか。」の問いに、「努力した」と、100%の生徒が答えている。学習意欲はあるが、それを結果につなげるためには、基礎・基本の定着を意識した学習を仕組み、獲得した知識・技能を適切な場面で活用して、自分の伝えたいことを分かりやすい語句で、書いたり話したりする表現力を伸ばす授業の展開が必要であると考えた。

特に【国語A】の問2「成否」という言葉を、聞いて分かりやすい表現に直す問題の正答率が、48.7%と低かったことを大きな課題ととらえ、【聞き手を意識し、分かりやすい語句を選択して話す】ことを、話し合い活動の中に意図的に仕組み、学力の二極化の改善と、さらなる学力向上に向けての手立てと考えた。

○ 学習指導要領の観点・目標・指導事項を踏まえた重点的な取組

学習指導要領の次の指導事項を関連付けて、国語科の研究主題を設定した。

- ・「A話すこと・聞くこと」ウ 聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分のものの見方や考え方を深めたり、表現に生かしたりすること。
- ・「C読むこと」エ 文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと。

上記のことから、身に付けさせたい力を以下のように整理した。

身に付けさせたい力

- 聞き手を意識した分かりやすく話す力
- 話し手を意識した受け止めて聞く力

2 公開授業について

第3学年 国語科学習指導案

日 時 10月8日(木) 5校時
指導者 教諭 中本昌恵
場 所 3年1組教室

1 単 元 未来へ向かって

2 教材文 「聴くということ(鷺田 清一)」(光村図書 3年)

3 学習のとらえ方

(1) 難解ではあるが、「聴く」ことに関して興味深い文章だと感じている。

臨床哲学者による評論文をどのように読んでいるか、一読後にアンケートをした結果、次のような傾向が見られた。《一読後の気付き・座席表より》

- ① ほとんどの生徒が難解だとし、その理由に語句・述べ方・考え方を挙げている。
- ② 半数近くの生徒が日々の生活経験から共感的な姿勢を示している。
- ③ 考えたい課題として「聴く人の態度」を挙げている。
- ④ 気がかりな表現として、「他人を聴く」「解釈してしまう」を数人が挙げている。

以上のことから、難解だと感じながらも、筆者の考えについて「なるほど」と共感する点があり、この「聴くということ」を読み解くことによって、日々の言語生活が豊かになりそうだという期待感がうかがえる。

(2) 臨床哲学者の視点でとらえた文章を読み、聴くことへの意識を高める教材である。

日常生活の「聞く」という無意識の行為を、単なる受動的な行為としてではなく「聴き手」として聴くときの「聴く態度」について、臨床哲学の視点でとらえた文章である。生徒が普段あまり意識することのない「聴く」という行為を、改めて考えさせるものである。「話を聴いてほしい人の話を聴く」ときの受け止め方について、哲学者や作家・宇野千代の人生相談などを引用して述べている。論旨の展開は一貫しており、伝えたいことは読み取れるが、具体的にどのような姿勢で聴くことが正しい聴き方なのかがしっくりとこない。そのもどかしさが生徒の思考意欲となり、何度も繰り返し読んだり話し合ったりするうちに、「こんな聴き方がいいのかもしれない。」という不確かな確かさに導くことができる味わい深い教材である。

(3) お互いが語り手・聴き手となって、深まりのある話し合いをさせたい。

学力差の顕著に見られる本学級では、分かる生徒が分からない生徒に教えたり、慮って思いを解釈したりすることが日常的である。本教材は、「カウンセリング」・「シンパシー」「心のケア」・「ホスピタリティ」・「リスク」という言葉から、臨床における「聴くということ」なのだということを、まずおさえておきたい。義務教育も仕上げに差し掛かっている彼らには、今後多くの悩みや打ち明けたいことが生まれるであろう。それを聴き手と

して受け止めるときの指針として、鷲田氏の「聴くということ」は多くのヒントを与えてくれる。だからこそ、そこを生徒にはこだわって読んでほしいし、話し合ってもらいたい。哲学という未知の世界の学問の扉を開かせると同時に、お互いの口から聴き手としての姿勢について、たどたどしくとも言葉として考えを引き出していきたい。

4 指導計画（全3時間）

- (1) 「聴くということ」を読み、読後のアンケートに答える。（1時間）
- (2) アンケートの結果から、筆者の考えで分からなかったことを話し合う。
 - ① 「相手の鏡になる」とはどういうことか？（1時間）
 - ② 「聴きながら言葉を継ぎ足す」ことがなぜいけないか？
 - ③ 「他人を聴く」とはどういうことか？
- (3) 「聴き方をどうすれば話し手が話しやすいか」について話し合う。

本時（1時間）

5 本時の学習指導

- (1) 主眼 「聴き方をどうすれば話し手が話しやすいか」について考え、話し合いの中でお互いの意見をよく聴き、自分の考えを話すことができる。
- (2) 準備 ワークシート、ホワイトボード、イレーザー、マジック、タイマー
- (3) 学習の展開

	学習活動・学習内容	生徒の反応	教師の支援
気 付 く	1 「聴くということ」のアンケート結果を配布し、「一番良い聴く態度とはどのようなものか」について考えていくことを告げる。（3分） ・3つの課題について話し合ったことの内容を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・友達のとらえにうなづいて共感する生徒。 ・アンケート結果の表を見る生徒。 ・特に反応がない生徒。 ・聴く態度で、相手とのコミュニケーションがうまくいくことに期待を抱く生徒。 	① 3つのことを課題で話し合ったことを紹介し、集中力を高める。 * 相手の鏡になるとは？ * 聴きながら言葉を継ぎ足すことがなぜいけないか？ * 他人を聴くとは？
	一番良い聴く態度とは、どのようなものかを考えましょう。		
捉 え る	2 「聴くということ」をどんな行為かに着目して読む。（6分）	<ul style="list-style-type: none"> ・大切なところに線を引きながら読む生徒。 	② 形式段落ごとに縦列で読ませる。大切だと思うところには線

		<ul style="list-style-type: none"> ・声を張って大きな声で読む生徒。 	を引かせる。
深める ・見つける	<p>3 自分の考えをワークシートに書く。(5分)</p> <p>4 8つの班に分かれ、班員と話し合っってホワイトボードに意見をまとめる。(15分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・悩みながらも自分の言葉と教科書の内容を照らし合わせて書く生徒。 ・3文節程度の文を書く。 ・共感したり、互いに質問したりして、班の意見をまとめていく生徒。 ・他者の意見に耳を傾ける生徒。 	<p>③④ 鷺田さんの言葉をどのように解釈して、自分の考えにつなげていったのかを説明できるようにさせる。(机間指導により支持的雰囲気高める。)</p> <p>*なぜ *だから *なるほど*すごいね *えらい *へえー</p>
広げる	<p>5 各班の代表が、なぜそのように考えたのかを発表する。(5分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ考えに共感する生徒。 ・言葉を足してあげたほうが心の整理がつくのではないかと質問する生徒。 	⑤ 感心しながら、相槌を打って聴く。(しっかりとほめる)。生徒の言葉を他の生徒につなぐ。
振り返る	<p>6 振り返りシートに記入する。(5分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を振り返って感想を書く。 	⑥ 聴く態度で、人を元気にすることができることを伝える。(素朴な疑問は哲学の入り口)

(4) 評価

「一番よい聴く態度とはどのようなものか」について考え、お互いの意見を聴き、自分の考えを話すことができたか。

1 主眼

「聴き方をどうすれば話し手が話しやすいか」について考え、話し合いの中でお互いの意見をよく聴き、自分の考えを話すことができる。

2 準備物

ワークシート、ホワイトボード、イレーザー、マジック

3 指導上の留意点

① 筆者の言葉を自分なりに解釈し、それを班の話し合いでふくらませるようにさせる。

相手の鏡になるということは、そのまま相手の言葉を返すということだから優しい口調で返してあげたいと思うよ。

② 共感や相槌のある話し合いになるよう、中間指導で言葉をかける。
③ 筆者の考えに納得がいかない場合も受け入れ、根拠をもとに話し合いをさせる。

聴きながら言葉を継ぎ足すのは、よくないかもしれないけど、気持ちを整理してあげることができるんじゃないかな。

評価 「聴き方をどうすれば話し手が話しやすいか」について、お互いの意見を聴き自分の考えを話すことができたか。

聴くということ 鷺田清一

めあて 聴き方をどうすれば、話し手が話しやすいかを話し合おう。

【聴くということ】

- ・ 受動的な行為
- ・ 選択的な行為
- ・ 相手の言葉をきちんと受け止めること
- ・ 相手の鏡になろうとすること

1 班	3 班	5 班	7 班
2 班	4 班	6 班	8 班

話し手が話しやすい聴き方とは？

例 相手に寄り添い、きちんと言葉を受け止め、言葉につまってもじっと待つて、安心して話せるような聴き方。

本時の流れ

① 本時の流れを確認する。

めあて

聴き方をどうすれば、話し手が話しやすいかを話し合いました。

◆ 前時のアンケートでお互いの感想が書いてあるワークシートを配付し、今日のめあてについて知る。

② 「聴くということ」について鷺田さんは、どのような行為だと言っていたか 本文を読んで確認する。

鷺田さんは「聴くということ」をどのようにとらえていましたか。

③ 鷺田さんのとらえ方を具体的な態度として考えさせる。(個人)

④ 個人で考えたものを四人班に分かれて話し合い、ホワイトボードにまとめさせる。(班活動)

⑤ まとめさせたものを黒板に提示し、全体で検討する。

◆ 気づきや、もつと知りたいことなどを発表する。

話し手が話しやすい聴き方は、次のようになりますね。

◆ 黒板に集約したものを提示する。

⑥ 学習を振り返る。

◆ 振り返りプリントに記入させる。

3 研究協議の概要と考察

(1) 機能マップを使った研究協議会

柳井市では授業の高機能化と授業改善を図るために、「授業の機能マップ」を用いての研修を重ねている。①知る・わかる／できる②疑問をもつ③考える・きめる④話し合う⑤かかわる・発表する⑥たずねる・教える、といった視点で授業のメモをとり、三色の付箋で【良かった点】青○・【改善点】赤●・【よりよくするための代案】黄☆に色分けして、後の研究協議で分析するものである。授業全体の流れをつかみ、全体のバランスを考えて授業力をつけていくためのマップなので、焦点を絞った協議というより、マップの視点による感想や意見が授業者に提示される。付箋の一部を紹介する

- 生徒が話し合い活動に慣れていて、お互いの意見を相槌を打ちながら聞いたり、自分の意見を話したりしていた。やわらかい感じが伝わった。認め合う姿勢が感じられる。
- 導入部分で班ごとに前時で話し合ったことを発表させ授業に対する集中力を高めていた。
- 筆者の論を受け入れて具体的な意見が表出されている。
- 単語でなくしっかりと説明する力がある。
- 班の意見のとりあげ方がよく吟味されていた。
- 難しそうに思えるこの文章に取り組みされたこの授業が生徒の心に残る
- 論説文【評論】の学習をもっと筆者に問うことができないだろうか。
- 各班からの話し合いで出てきた意見についてもっと、話し合う時間がほしかった。(時間配分の工夫)
- 抽象と具体を意識させる。作者の意見と自分の意見。
- ☆ 読解を終えて、「聴く」に絞って考えさせるとよかった。
- ☆ 聴く＝人との関わりの生き方(筆者の主張)を押さえる。
- ☆ 教材の読み取りか自分達の意見かに分けてはどうか。

この授業の全体的な総括は、学力向上推進リーダーの柳井中教頭の片山京子先生が授業記録用紙に詳しく掲載され、市内の中学校にも紹介された。授業記録用紙は、各校を回って指導助言にあたる片山教頭先生が、参観授業をして配付されるもので、市内の先生方の授業の様子が把握でき刺激となる取組である。《資料3 授業記録用紙》

(2) 指導助言 山口短期大学客員教授 和田征文 様

『目前の子どもの現実からスタートすべきである。』和田先生の指導助言をお聴きしながら、県内の先生方にぜひこの助言を伝えたいと思った。山口県教育を力強く牽引して来られた和田先生の熱情あふれるお言葉に、教育者の端くれとして奮い立つものがあつた。その場におられた先生方は、きっと共感されたことだろう。臨床哲学者の難解な文章を、魅力ある教材としていかに印象的な授業として仕組み生徒に力を付けさせるかを、資料

をもとに丁寧にご指導いただいた。難解さを乗り越えさせるためには生徒の素朴な疑問や感想を原点にして、授業を仕組んでいくこと（生徒の授業アンケート）の必然性や教師による徹底した教材研究と分析、全体構造図による授業展開の方法等実践に裏づけられた学力向上へのヒントをいくつも紹介された。今後の山口県教育の真髄ともいえる①コンピテンシー（資質・能力）に基づく教育改革について②アクティブ・ラーニング（課題の発見・解決に向けて主体的・共働的に学ぶ学習）による授業革新についても具体的に述べられた。臨床哲学者 鷲田清一の「聴くということ」を学習材としたことで、今後、国語教育で「何をどう学ばせるか」が見えてきた。温かく見守りながら支援して下さった和田先生に感謝申し上げたい。

4 今後の取組

（1）学力定着確認問題の結果より

3年生は、それぞれの進路に向けて一人ひとりが目下奮闘中である。「聴くということ」の授業を通して聴く意識の深化がみられた。人の言葉を横取りせずじっくりと待ったり、相手が話しやすい雰囲気を作ったりするなど日常生活に生かそうとしている。1、2年生については、学力定着状況確認問題の結果から見えてきたことについて全職員で考察を加えながら研修を進めている。結果は1年69.5%、2年57.0%である。質問紙に興味深い結果が出ている。心の教育を軸にした学力向上を掲げて道徳や話し合い活動を充実させてきた結果、授業について「発表する機会」1年94%、2年97%、「話し合う活動」1年94%、2年95%、「国語の授業がわかる」1年84%、2年86%である。「宿題をしている」1年97%、2年100%である。授業もわかるし、宿題もしている。

しかし、基礎学力が十分に定着しているとはいえない。1年生は、比較的個人差が少ないので一斉授業でのレベルを上げた指導のあり方、学力差が激しい2年生は、家庭学習の質の改善と個別指導の徹底が課題である。

（2）国語科を中核に全教科で「言語活動の充実」を図る。

11月に愛媛県で行われた「第44回全国中学校国語教育研究会」に参加した。その際、今治市立日吉中学校の取組に学力向上のヒントがあった。国語を中核に、各教科で「言語活動の充実」を図るための取組である。国語科の観点「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」を全教科の年間計画のどんな活動で仕組むかを一覧表にしているものである。

また、その活動が中教審答申で示された「思考力・判断力・表現力等を育む言語活動の充実」のどれに当たるかを明記し、言語活動の目的をはっきりさせた資料である。これを参考にして柳井西中学校の言語活動を中心とした全体計画を作成し実践したいと思っている。生徒の自己肯定感を尊重しつつ、授業改善による一斉指導のあり方と生徒一人ひとりの学力に応じたきめ細やかな指導を探りながら、学力の定着と向上を図っていきたい。

